

## 主の降誕(夜半のミサ)の説教

金 大烈 神父 2010年12月24日(金)

《イエス様がこの世に来られた意味 - 私たちの目の高さに降りて来てくださった神様 - 》

降誕祭おめでとうございます。今日は、イエス様の誕生日です。イエス様がこの世に降りて来てくださった意味について、皆様と一緒に考えて分かち合いたいと思います。つまりクリスマスの意味について、もう一度皆様と話し合いたいのです。そのために、私が作った話を紹介させていただきます。

田舎に住んでいる、ある若いお母さんが、5歳くらいの子どもを連れて東京に行きました。このお母さんは、せっかく東京に来たのだから、子どもに自分たちの村では見られない建物やいろいろな物を見せたいと思いました。だから、渋谷や新宿など、人の多い所へ子どもを連れて行きました。そして、「あそこに見えるのが東京タワーで、私たちの村では見られないものよ。」などと一生懸命に説明をしました。しかし、子どもはあまり嬉しそうではなく、むしろ嫌がって「早く家に帰りたいよ。お母さん、もう帰ろうよ。」と大きな声で言います。お母さんは子どもの気持ちが分からなくて、「なぜなの。私たちの村では見られないものばかりでしょう。もっとよく見てちょうだい。」と言います。しかし子どもは嫌がるばかりで、お母さんはどうしたらよいか困り果てます。その時お母さんがふと足元を見ると、子どもの靴紐がほどけていました。そこでお母さんは、身をかがめて紐を結びなおそうとしました。そして、その姿勢で目を上げた途端に、「ああ、これが原因だったのか」と気づきました。お母さんが、子どもの背の高さに身をかがめて周りを見ると、見えるのは人のお尻や脚ばかりで、全く景色とは言えないものでした。お母さんは、「あなたの目の高さに合わせることに気づかなくて、ごめんなさい。」と言いながら、子どもを理解した、という話です。

降誕とは、聖なる誕生のことです。私たちは、神様が人間の姿になってこの世に来られたことを信じています。では皆様は、今まで降誕の意味をどのように理解して来ましたか。一言で言えば、神様は、わざわざ私たちの目の高さにご自分の目の高さを合わせて、降りて来てくださったのではないのでしょうか。

皆様に生き物を創ることができる能力が与えられたとしましょう。そして、皆様が何か生き物を創ったと考えてみましょう。創った生き物が、自分の考えたとおりに、目的にあった振る舞いや動きを見せてくれたら、皆様は命を与えた創造主として、たぶん嬉しくなるでしょう。逆に、創った生き物が滅茶苦茶で、皆様が考えたことと全く違うことをするようになったら、皆様の心はどうなるのでしょうか。「ああ、失敗した。なぜこんなものを創ってしまったのだろう。なぜこのように困らなければならないのだろう。」と思うのではないのでしょうか。そして、生き物ですから、自分の自由にするのもできないのでしょうか。

もっと具体的なたとえを話しましょう。皆様が10か月間お腹を痛めて産んだ子どもたちは、親である皆様の考えた通りに動いていますか。もちろん、よい子どもたちもたくさんいると思いますが、

ほとんどの子どもたちは、産んでくれた親の心さえ察してくれないのが現実でしょう。

神様の場合はどうでしょうか。命を捧げて人間にいろいろな祝福を与え、この世の中を善く、上手に生きてほしいと頼みました。けれども人間は、「いつあなたが私を創ったのでしょうか。」と神様を拒むようにさえなってしまう。その時、神様の心はどうだったのでしょうか。『神様の一番の傑作は人間であり、一番の失敗作も人間である』という話がありますが、皆様もそう思われますか。いいえ、私たちは神様の失敗作ではありません。イエス様は、<sup>よこ</sup>汚れだらけ、けがれだらけ、罪だらけのこの世の中に、自分の目の高さを低くして、人間の視線に合わせて、この世に来てくださったのです。

皆様の目の前に、人形の幼子イエス様がいらっしゃいますね。2000年前のベツレヘムというところを想像してみてください。泊まるところがなくて馬小屋に泊まり、飼い葉桶に寝かせてられているイエス様を考えてみてください。自分の力では何もできない赤ん坊の状態です。人生の中の一番無力な姿でこの世に生まれて来たのです。そこに、大きな意味があるのです。神様は、神様の姿ではなくて、人間の心に合わせて来られたのです。だから、私たちは神様のみ旨を分かるようになったのです。どのような生き方が、正しい、望ましい生き方なのか、どうすれば自分らしく生きることができるのか、そういうことを考え始めたのです。

今日私たちは、降誕祭を祝う心でこのミサに与っていますけれど、降誕祭の本当の意味は、希望が与えられた、ということです。神様は私たちを見捨てられずに、ずっと前から私たちを信じてくださっていたのです。それを感謝することに、降誕祭の意味があります。もちろん、1年前、2年前に洗礼を受けられた方もいらっしゃれば、60年前に洗礼を受けられた方もいらっしゃいますが、神様は私たちが生まれるずっと前からすでに私たちを信じてくださっていたのです。それをよく考えてください。

皆様にとって、去った1年間には、いろいろな苦労も悩みもあったと思います。反面、喜びもあったと思います。喜びの心であれ、苦しみの中であれ、その心の中に、神様は何パーセントくらい場所を占めていましたか。人生は結局過ぎてしまうものです。優れていると言われている人も、いつかは人生が終わります。こだわっても、いつかは手放さなければならぬのが人生です。しかし私たちは、「本当に変わらない道を教えてくださったイエス様を信じています」と毎週日曜日のミサで告白しています。だから、その言葉にふさわしい心と振る舞いが必要でしょう。

皆様、信仰は周りのために持つものではありません。自分のために持つものです。自分の生と死のためです。そして、生と死を越えた永遠の命のためです。私たちが絶対的な目で見ようとするれば、今日は「嬉しくて、嬉しくて、たまらない日だ」と自然に思えるでしょう。

皆様、今日は、条件なしに感謝しましょう。そして、「今まで上手くできなかったところがたくさんあるのですが、これからもう一回頑張ります」という気持ちになりましょう。

もう一回繰り返します。私たちの信仰は、誰のためのものでもありません。自分自身のためのものです。それを意識してください。いつか、神様と1対1で向き合う時、自分が作って来た全てのこと

を問われます。その時「足りないことがたくさんあったのですが、自分なりに頑張ってきました。」と言えるくらいになる必要があります。

今日は本当におめでとうございます。イエス様がこの世に来られた意味を改めて心に置きましょう。そして、皆様それぞれの胸に新しいイエス様の誕生ができるように、よろしくお願いいたします。

ありがとうございました。